鹿児島カトリック教区報

〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行　教区広報部
1部60円年間〒共1100円

道　標

2013年 年頭教書

ご聖体への賛美と礼拝を大切にしましょう

―神との親密さを育む聖体礼拝―

鹿児島教区長　司教　郡山健次郎

鹿児島教区のみなさんに新年のご挨拶を申し上げます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。早速ですが、新年にあたって、今年も皆さんにお願いしたいことがあります。

昨年来、祈りの教区となるためにノベナの祈りの導入を進めてきましたが、祈り合う教会の姿が少しずつ感じられるようになってきたのはとても嬉しいです。信仰年の最中にあることから、今年は祈りの具体的な側面をさらに推進していきたいと思います。

私の夢

先ずは私の夢を紹介したいと思います。

教区本部にベトナムのシスターたちをお招きしたいという希望があります。修道院の建物をはじめ受け入れ態勢が整わないので実現はいつになるか見当もつきません。そんな折、本部棟横に修道院を建てたらいいという案が浮上しました。これはもちろん思いつきの段階ですが、もし実現したら、永久礼拝のためのチャペルを併設したいと思っています。これが私の夢です。

これを夢として終わらせないために、先ず、教区として取り組むべきことがあります。主日のミサで毎回席がぎっしり埋まるようになるため、また教会に興味を持つ人が増えるためにも、聖体礼拝という信仰の文化を鹿児島に根付かせたいと思っています。具体的な提案は後述しますが、なぜ聖体礼拝なのかを話さないといけません。

教会活性化への道

数年前、インドの山間部では信者が爆発的に増えたことがありました。もちろん、今も信者は増加の一途をたどっていますが、その頃ローマでたまたまお会いした現地の司教様にそのことについて話を聞くことができました。「理由？永久礼拝。それしか考えられません」ということでした。永久礼拝というのは、一年を通して一日中聖体を顕示して祈ることですが、そのことと福音宣教がどうつながるのかピンときませんでした。

その後訪問したフィリッピンでもベトナムでも、またお隣の韓国でも永久礼拝の聖堂がありました。フィリピンはもともとカトリック国なので分かるとしても、目を見張るのはベトナムの教会の元気な姿です。共産主義政権下で宣教の自由がないにもかかわらず、教会は衰えるどころか家庭での信仰はますます深く根を張り、その実りとして多くの召命を生み出していることは周知のとおりです。その地域の信仰生活が健全であるかどうかの基準は召命があるかどうかということにつきます。二人の神学生と二人の助祭をいただいている韓国の教会についてはことさら述べるまでもありません。

こうした教会が元気な国々に共通していることが永久聖体礼拝であることに気が付いたのです。教会が活発な理由は特定できないとしても、その時以来、私の中では、理屈を超えて永久聖体礼拝と教会の活性化がイコールで結ばれたのです。主日のミサが生活の中心であるとするなら、そして、イエス様を救い主と仰ぎ、イエス様なしの生活はもはや考えられないほどにかけがえのないお方であると心から信じているなら、その方の形見であるご聖体を特別に敬い大事にするのは当然なことです。聖体賛美式と聖体礼拝。鹿児島教区に足りないのはこれだと思うようになりました。主への熱い思いを具体的に表すのはこうしたご聖体への信心が最適だと思っています。

神との親密さを育む聖体礼拝

主日のミサはもちろん、毎日のミサを欠かさない信者が大勢いることは素晴らしいことです。しかし、永久礼拝で祈る人々の姿には主日のミサで見るのとは違う熱さを感じました。同じご聖体の前に出るのになにが違うのか。はっきり言えるわけではないのですが、信心業がきわめて自発的なものであることからくる違いなのかもしれません。語弊がありますが、いわば、きちんとした典礼の流れに沿って参加するという習慣化した信仰の姿との違いということもできるかもしれません。

永久礼拝では決まった祈りの仕方はありません。ご聖体の前で静かに時を過ごす。み言葉を読み、ご聖体のイエス様と静かにお話をする。ロザリオのお祈りを捧げる。一人で、あるいはみんなで聖歌を口ずさむこともできます。何よりも静寂さの中に身を置き時を過ごすことが息抜きになる。たとえ主日のミサを大事にしているとしても、神様はお父さんとして、そんな自発的な聖体礼拝に励み、忠実な信者の道を歩こうとしている子供たちのけなげな努力を喜ばないはずはありません。

こう考えると、信心業は、本来自主活動であって、まったくの善意から生まれたものです。普段の人間関係では、善意であればすべてゆるされるというわけではありませんが、こうした主への善意に満ちた素朴な信心が無駄になることはありません。むしろ神のみ心を動かすのです。ノアの洪水を巡る創世記八章の記事には興味深いものがあります。概略次のようなことです。地上の水が引いたのでノアは主のために祭壇を築き、焼き尽くす献げ物をささげました。主はなだめの香りをかいで言われました。「人にたいして大地を呪うことは二度とすまい」（八・二〇―二一）。ノアが自発的にささげた、焼き尽くす献げ物は神に対する全幅の信頼を示すもので、それは神の心を動かし「二度とすまい」と神から確約さえも取り付けることになりました。

宣教としてのご聖体信心

ご聖体をいただくことの意味をよく理解しないと拝領することが唯一の目的になってしまいます。それは自分の聖化だけでなく、イエス様と同じく自分を無とすることで人々の救いのために生きることを意味しています。そして、聖体礼拝はその延長線上にあります。すなわち、ご自分を渡された主を思い、主のみ心を生きようと心を整える時と言えるからです。

世界聖体大会が四年に一度開催されています。習慣化した信仰生活に新たな息吹を注ぎ、信仰の活性化を図ることを目的としています。五十回目となる昨年はアイルランドで開催され「聖体：キリストとの一致、わたしたち同士の一致」がテーマでした。このことからも分かるように、聖体への信心は時代遅れなものではありません。むしろ、引き裂かれた主の御体を思い、その痛みを共有しながら、同じようにさまざま価値観や社会状況の違いで引き裂かれている私たちの社会や教会共同体が一つの食卓のもとに集められ、主の御体で養われて平和と一致が回復し、神様の家族となっていくことが目指されています。「すべての人を一つにしてください」（ヨハネ一七章二一節）という最後の晩餐での主の祈りを私たちの祈りとするためのきわめて宣教的な業なのです。そう考えると、インド宣教の成功の秘訣が分かるような気がします。

具体的提案

わたしたちの人生が、家族や親しい人々との思い出によって成り立っているように、わたしたちの信仰生活は主との思い出の上に成り立っていると言えます。それは、イスラエルの人々にとって出エジプトという出来事が決して忘れることのできない神様の救いの業の思い出であるのと同じことです。

そういう意味で聖体礼拝は、一週間を振り返りながら私に働かれた神の業を思い起こしながら、み言葉をゆっくり噛みしめ、主のみ心に触れて主ご自身と出会う時であり、新たに信仰を喚起する時となります。

そこで、次のような提案をさせていただきます。毎週一回の聖体賛美式と月一回日曜日のミサに引き続いての正午までの聖体顕示と聖体礼拝を各小教区で実施していただけるようぜひ話し合いを持っていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

新しい一年も皆さん一人ひとりが幼子からの祝福で満たされ、皆さんの家庭が賛美と感謝で満たされる日々であるよう心からお祈りいたします。

八代殉教祭に参加して

ザビエル教会　楠畑トシエ

キリシタン大名・小西行長の領地で信仰を守っていた肥後（熊本県）八代のキリシタンたちは、小西行長が関ヶ原の戦いで敗れると、新領主となった法華教徒・加藤清正によって迫害されました。キリシタン最初の迫害は、八代から起こったのです。その八代のキリシタン殉教者を追悼する殉教祭が、毎年十二月の第一主日、八代カトリック教会で行われます。今年は、十二月二日でした。

私たち十五人の信者たちは、坂本神父さまと一緒に、ザビエル教会を朝七時に発ち、九時過ぎに八代教会に到着しました。教会敷地内の右側には、殉教者の碑、十一人の名前が彫ってありました。私たちは碑文の前で、殉教者の方々のために、花束をささげてお祈りをいたしました。それから、主任司祭でいらっしゃる夫津木神父さまの案内で、信徒室に移動。そこで、お茶をいただき、くつろがせていただきました。

十時から、殉教祭記念のごミサが始まりました。はじめに当時を偲ぶ殉教物語が朗読されました。祭壇の正面には、十一人の殉教者の名前が記された木の十字架に花がささげられており殉教者への表敬・献香がなされ、ごミサの開始です。

八代殉教祭賛歌の三番の歌詞には、子供のことが詠われていました。

「背負われていく幼子を待つ刑場の北の風、すでに出でたる父のあとを追う。神の使いに背負われて」

この歌詞はとても私たちに歌える歌ではありませんでした。

ミサ後、歴史に詳しい信徒の方の案内で、市内の殉教の地を巡らせていただき、十二時に昼食。八代教会の信者さんたちと昼食を共にし、楽しい分かち合いの時を持ちました。これも、坂本神父さまと夫津木神父さまが二十数年来の旧友の間柄だったこともあって、良い雰囲気が生まれ、よい分かち合いが出来たのだと思っております。

昼食後、熊本城に移動。熊本城から、肥後藩主細川家の菩提寺・秦勝寺跡に移動。ここに、キリシタン・細川ガラシア夫人の墓廟があります。私たちは、ガラシア夫人の数奇な運命を偲びながら、古城さんが用意してくださった花束を墓前にささげ、黙とうをいたしました。

ザビエル書院の窓

［今月の一冊］

愛するという選択
テゼのブラザーロジェ
1915-2005
サンパウロ
定価1,000円＋税

2013年の手帳やカレンダーをお持ちですか？ザビエル書院にはまだ在庫があります。どうぞお買い求めください。

文芸

短歌

大笠利教会　稲牛憲
シマで言ふ米マブリ吾八十八主に祈りつついのちいたわらん

鹿児島純心　川上和
荒波のみ葉月の航路帆をたたむ籠のみことば薩摩をうるおす（ザビエル様の祝日によせて）

鴨池教会　前田儀子
とめどなく涙こぼるる宵なれば妹の残せしセーター着てみる

俳句

鹿児島純心　川上和
初霜や祈る心に御子ねむる

出水市　沖弘子
冬ざれの里にそびゆる天主堂

鹿児島市　徳永ノブ子
クリスマス近づく街や色あふれ
菊の花マリアの像の足下覆い

奄美市　林常広
酒好きのクリスチャンとは我のこと

霧島市　政ノブ子
福寿草愛と希望の信仰年

第二バチカン公会議五十周年に思う

浦上教会（大熊小教区）　平三國

昨年は第二バチカン公会議の開催から五十周年でした。開催当時、私は二十歳代でした。約四年間の公会議の間に十六の公文書が公布され、私はそのうちの十一のものを求めて読みました。公会議の招集を宣言されたのはヨハネ二十三世。一般信徒は「公会議の実りを聖霊に願う祈」の「我らの心を親しくおとい給う聖霊よ、公会議において決定されることがらをば、すべて誠意もて受け容れ、善意をもて実行するを得んために我らの精神を真理のうちに堅め、我らの心を素直ならしめ給え」と熱心に祈ったものでした。

公会議後、大きく変わったことといえば、何といってもミサや典礼における自国言の使用です。ラテン語から日本語（それまでは司祭は信徒に背を向けて侍者とラテン語で祈りを進め、信徒は自国語の祈りでミサにあずかっていました）となりました。

また聖体拝領をするためには、前夜の零時からは固形物はもちろん水の一滴も飲んではならなかったですし、ご聖体は司祭から舌に置いてもらって頂いていました。それに心の準備も大変でしたから、告白をすませてから拝領していたものです。祈りの文体も大きな変化でした。それまでは全国統一の「公教会祈祷文」の「給え」調の文語体で祈っていましたが、「日々の祈り」と題した口語文となりました。

また神のみことばをもっと重視すべきであるとのことで「聖書と典礼が行事の最も重要な位置を示す」という認識からミサ聖祭で信徒が聖書朗読をするようになりましたし、家庭や集会でも聖書がよく読まれるようになりました。そして「聖書はご聖体とほぼ同等」とまで言われるようになりました。

公会議以前の教会は、世界に対しては閉鎖的で近代社会を支え導く自由、平等の論理や合理主義、実証主義、さらには資本主義的価値観を信仰の神秘や教会の神秘を脅かす危険な毒としてこうしたことから、イエス様の厳しい言葉には、(1)この世が終わるのであれば最早、従来の（この世に於ける）価値観は通用しない。(2)救いは人の子であるご自分に従うことにある。という以上二つの背景があるのです。

実に、イエス様は自分の説教を聴いている聴衆が生きている間にも世界の終りがやって来る、と考えていたからこそ（マタイ10・23）、すべてを捨てて自分に従いなさい、ということを語られたわけです。こうしたことから、イエス様は世俗的な関係性と物の放棄、即ち、家族関係や財産を捨てよ・憎め、といった非常に強烈な印象を与える言葉が使われたものと思われます。総じて、首を傾げたくなるイエス様のみ言葉であっても、その言葉が発せられた背景のことも含めて考えると理解できるものです。

断罪し、敵視するような姿勢をとり近代世界と対峙し続けているかのようでした。

そして神の民についても、カトリック教会が神によってイエス・キリストを通して必要不可欠なものとして建てられたことを知っていて、しかもなおその教会に入ること、あるいは教会の中に終わりまで留まることを拒否するとすれば、このような人々は救われることができないであろうとの見方でした。それが福音をまだ受けなかった人々も、いろいろな意味で神の民へ秩序づけられている…本人の側に落ち度がないままにキリストの福音ならびにその教会を知らずにいて、なおかつ誠実な心を持って神を探し求め、また良心の命令を通して認められる神の意志を恩恵の働きのもとに、行動を持って実践しようと努めている人々は永遠の救いに達することができるとなってきたのです。

公会議から半世紀が過ぎましたが、ここで再度、公会議の教えを学び生かしていきたいものです。

家族が揃い楽しい時間を過ごすことは何にも代えがたいことです。しかし、福音書の中でイエス様は、永遠の命を受け継ぐために家族や財産を捨てよ（マタイ19・29）、とか、弟子になるためには親兄弟、さらに自分の命すら憎め（ルカ14・26）、と仰っています。これらの箇所について疑問を持たれる方が少なからずおられるのではないでしょうか。ちょうど家族が集まるこの時期に、なぜ、イエス様はこのような言葉をお使いになったかを考えてみましょう。

この言葉を理解するためには、イエス様が終末とご自分についてどのように考えていたかを理解しなければなりません。イエス様の言葉には、すぐにでも終末が来ると考えていたと思わせるような箇所が多々あります（マルコ8・34～35、10・29、13・32～33等）。また、黙示思想（神の創造により始まった歴史は最後の審判や死者の復活によって終わりを迎えるという思想）を踏まえ、イエス様は自らを「人の子」と呼ぶことから、ご自分を終末時に世界を裁くために神の栄光と権威を帯びて現われる存在として捉えていたことが伺われます（マタイ13・41、16・27、19・28、20・19、24・30～31、25・31等）。

スーさん（鈴木助祭）のやさしいみことば

イエス様の終末への思い

地元の熱意に支えられて三十年

屋久島で恒例のシドッチ祭

十一月二十三日（金）屋久島町小島の「神父シドッチ上陸記念碑」前で、三十回目となる町主催のシドッチ祭が行われた。シドッチ神父の功績を屋久島から発信したいと始められたこの催しには、町関係者や地元信者のほか鹿児島本土から郡山司教らが参列したほか、坂本進神父を団長とする各地からの巡礼団二十数人の姿もあった。

イタリア人宣教師ジョバンニ・バチスタ・シドッチ神父は、キリスト教禁制下の一七〇八年十月十一日、日本で宣教するために密かに屋久島の恋泊に上陸した。しかし間もなく捕縛され、長崎経由で江戸へ送られ一七一四年十月二十一日、幽閉先のキリシタン屋敷で目的を果たせないまま獄死している。宣教という目的は果たせなかった神父だが、幽閉中に神父を審問した新井白石がその記録に所見を加え「西洋紀聞」「采覧異言」を著し、そのことが後の開国につながることとなった。

この日本における西洋文化導入の恩人とも言えるシドッチ神父の偉業を称えようと町（当時の屋久町）では一九八〇年に上陸記念碑を建立、一九八三年から毎年「シドッチ祭」を開催している。

午前九時から記念碑前であった町主催のシドッチ祭に参加した信者たちは、その後、近くの屋久島教会（J・タム神父主任司祭）でミサをささげ、シドッチ神父の宣教への熱い心に倣おうと祈りをささげたほか、屋久島でシドッチ神父の研究に邁進し今は亡きザベリオ宣教会のR・コンタリーニ神父の永遠の安息を願った。

晴佐久神父の講演に四百人超集う

今年の市民クリスマス

十二月九日（日）ザビエル教会で市民クリスマスが開かれた。五十二回目となった今年の催しのテーマは「絆―愛に生きる」。講演会の講師には東京教区は多摩教会から晴佐久昌英神父が招かれた。会場には、毎年数多くの人々を洗礼に導くことで有名な神父から力を得ようと四百人を超える信者、市民が集まった。

「神から、聖霊から遣わされた道具としてここで講演している」と語る晴佐久神父は、これまでに出会った人たちとのかかわりから、神と人間の絆の強さを強調し、「神はすべての人を愛している。その愛に気づいてください」と熱いメッセージを送った。

また講演を終えた晴佐久神父は翌十日（月）午前十時からザビエル教会でミサをささげた。ミサには平日にもかかわらず大勢の信徒が駆けつけ、神父の人気とその熱い心のほどがうかがい知れた。

手取教会（熊本）でミサ曲を披露

谷山教会のアルフォンソ合唱団

谷山教会の聖アルフォンソ合唱団は十一月二十五日（日）の王であるキリストの祝日に、明治時代に建てられたゴシック様式の熊本の手取教会でハイドンのミサ曲「Missa brevis St Joannis de Deo」を歌わせて頂きました。谷山教会の合唱団にとって熊本の手取教会でミサ曲を歌うことができたのは新世界に入る気持ちになりましたし、また手取教会にとっても革命的なことでした。

午前十一時半から第二のミサが始まりました。二階のパイプオルガン前の少々狭い所で二十七人が肩を寄せ合って歌いました。

合唱団が毎週日曜日に午前も午後も熱心に練習した成果を祈りの心を込めて披露しましたところ、後日、手取教会信徒代表から次のメッセージが届きました。

「…私の心に残りましたのは、ミサ終了後の合唱団に対する手取信徒の感謝の拍手の時でした。二階におられる合唱団の方々が自らも拍手をしておられ、双方が一体となった光景を見ることができ、これが主のもとに集まる信徒の姿なのだ、と感じたことです。…何れにせよ、現代の手取教会では経験のできないミサを体験いたしました。ミサには未洗者の方も参列しておられ感動されたようです。」

ミサ後、立派な信徒会館で手取の主任、助任司祭と信徒の代表の方々と一緒にお弁当を頂き、交流のひとときを過ごしました。主任司祭の牧山勝美神父様からは「これほど歌い込んでいるとは正直思っていません」でした。発音もとても上手でした。男性の歌声があったのがうらやましかったです」などと溢れる笑顔でご挨拶を頂きました。私たちが出発した後、おおいに刺激を受けられた信徒の方々はお茶を飲みながら、受けた印象について話に花が咲き、これからの手取教会の合唱団についてまで話が発展したようでした。（報告アルフォンソ合唱団）

短信

▼サダナの集い

十一月二十三日（金）から二十五日（日）までの三日間、教区本部を会場に東洋的瞑想を取り入れた祈りの集い「サダナ」が開かれ、数人の信徒が植栗彌神父（イエズス会）の指導を受けた。

▼祈りを深める集い

十一月十三日（火）から十二月十一日（火）まで毎週火曜日に、祈りを深める集いがレデンプトール宣教修道女会のシスターモニカ・エルハルドの指導でザビエル教会であり、十人あまりが「信仰年をよい機会として信仰を深めよう」というひとときを味わった。

2013年　「それでも…」の心で充実した信仰年を過ごしましょう

司教　郡山健次郎
名誉司教　糸永真一
総代理　小川靖忠

教区司祭団
栃尾泰英（瀬留）、小川靖忠（大熊）、永山幸弘、大野和夫（聖心）、G・ティエン（小宿）、小隈憲士（鹿屋）、O・ベルナルディーノ（志布志）、坂本　進（溝辺）、牧山田一（吉野）、寝占敦之（教区本部・玉里）、P・アン、丸野六雄（ザビエル）、泉　浩二（鴨池）、竹山　昭（紫原）、J・ドゥン（加世田）、美島春雄（指宿）、J・タム（種子島）、松森孝雄（教区本部）、中野裕明、末吉卓也（日本カトリック神学院）、田原　章（聖マリア学園）、田邊　徹（恵の丘）、成相明人（東京）

レデンプトール会
大松正弘、J・レヒナ（徳之島）、H・ハヌス（和泊）、石田　望（出水・阿久根）、山口重義（阿久根）、M・アッシャー（大口）、T・メニッヒ（川内）、J・ハンマ（入来）、福崎英雄、盛　克志、W・フリチェル、J・ムイベルガ（谷山）

コンベンツアル聖フランシスコ修道会
松永正男（大笠利）、柳本繁春、久保芳一（古田町）、榊　修（古仁屋）

聖ザベリオ宣教会
J・サンタマリア（国分）、東　研（姶良）、S・ロベルト（静養中）

その他
岡　俊郎（イエズス会・純心聖母会鹿児島修道院付）、J・サントス（神言会・教区本部）、山口好信（カルメル会・鴨池教会）

助祭
鈴木康由（日本カトリック神学院）、チョン・ポフ・チョン（鴨池）、ソン・ジン・ウォク（教区本部）

教区大神学生
貴島丈弥（フィリピン）、パク・チャン・キュウ、イ・ビョン・ドク（仁川カトリック大学）

教区終身助祭
池上聖行（徳之島）、桃薗淳一郎（鴨池）、久保俊弘（谷山）、四条淳也（喜界島）、川口　茂（加世田）、石神秀人（阿久根）

キリシタンの歴史　九

高山右近（上）

溝辺教会主任司祭　坂本　進

1　右近の人物

高山右近（一五五二～一六一五年）は、日本キリシタン史における最大の人物といえます。彼の影響で、小西行長、黒田官兵衛、蒲生氏郷、細川ガラシアなどを受洗に導き、セミナリオ（神学校）を開校させ、近畿、北陸金沢にキリシタンを隆盛せしめたのです。それらは、すべて右近の功労に帰せられます。

キリシタン禁教令を発令し（一五八七年）、右近を罰し追放せしめた豊臣秀吉も、右近の人格の高潔さには、寸分の疑いも持ちませんでした。大阪城で、家臣が秀吉に右近の悪口を言うと「右近に限って、決してそんなことはない」と、秀吉は、悪口を信じなかったといわれています。また、大阪城で、家臣たちが誰かを批判していた時、側を右近が通ると、陰口がぴたりと止まった、といわれています。右近に接すると、そのような陰口が恥ずかしくなるのです。私もそうなりたいと思っています。

権力者秀吉に追放されてからも、右近は、親友・小西行長だけではなく、秀吉の実弟でナンバー2であった大納言・豊臣秀長、ナンバー3（秀長死後、ナンバー2となる）の前田利家などの陰の支援を得ていました。そうさせたもの、それは、右近の高潔な人格に拠っています。

信仰心があったとしても、それに伴う実りとしての人格・徳、そして信仰を貫く勇気と決断力、信仰を伝え得る能力・熱意がなければ、人に感銘を与えることは、できません。今、私たちの信仰はどうでしょうか。

2　右近の信仰

右近は、父・ダリヨ高山飛騨守が、イルマン（修道士）ロレンソから受洗した時、一緒に受けました。十二歳の時です。父・ダリヨは信念の人であり、信仰も徹底せねばすまない性質の人であったようです。

右近は、はじめは信仰にあまり熱心さを示さず、戦国武将としての道を歩み、主君の高槻城主和田氏を破って、高槻城主となりました。下剋上の戦国武将の生き方をしていたのです。

しかし、何かが右近をゼウス（神）に導き、回心してからは、信仰を第一とし、高槻をキリシタン信仰の浄土とすること、及び、自身の生き方を信仰第一、高潔・清浄にすることに、全力を傾けるようになりました。

彼のプライオリティ（優先順位）は、常に、神第一、教会第一でした。それは、慈悲の心に徹すること、人を赦すこと、人の悪口・批判を決してしないことを右近が実践したことから知られます。

右近には、猜疑心、嫉妬心がありませんでした。しかし、私たちには、猜疑心、嫉妬心、人を決して赦さない心、人を落としめ・陥れる心が起こることがないとはいえません。でも、そうでなくありたいんです。右近の信仰から、私たちは多くのものを学ぶことができるのではないでしょうか。

3　右近の信仰の証

そして、右近は、最高権力者であった秀吉から、『キリシタンを棄てないなら、大名の地位をはく奪する』と脅されても、キリシタンであることを捨てず、大名の地位を棄てて、追放処分を受けたのです。小西、黒田、蒲生らのキリシタン大名は皆「キリシタンを棄てる」と秀吉に言ったのにです。私たちは、どうでしょうか。

このような右近の潔さ、信仰の証は、私たちを感動させずにはおきません。

かかる日本キリスト教史上最大の聖人であり、信仰の模範である右近がなぜ列聖されないのか不思議でならないのです。たとえ、列聖されないでも、右近が私たち日本人キリシタンの最大の模範者、信仰の証し人であることに変わりはない、と私は思っています。高山右近は不滅なのです。

右近の影響によって多くの人々がキリシタンになったのは理由があります。それは、彼の生き方と生活そのものが信仰であったからです。私たちは、どうでしょうか。

右近の生き方と生活、それ自体が説教でありました。その人柄と清らかさ、それは、人を惹きつけずにはおかなかったのです。右近は、現世におけるあらゆるもののうちで、最も望ましく美しいものをキリシタンの中に見い出し、それを人々に伝えようと望んでいました。

キリスト教信仰の中には、人生で最も望ましく美しいものがあります。私たちは、そのことを、確信しています。かかる確信こそ、右近をキリストの使徒とならせ、宣教への熱意・情熱を湧出させ、著しい宣教の実り（成功）をもたらせた所以ではなかったでしょうか。私たちも、右近にまねぼうではありませんか。

（参考文献）
ラウレス『高山右近の生涯』海老沢有道『高山右近』吉川弘文館。新人物往来社編『キリシタン大名の妻たち』新人物往来社。助野健太郎『キリシタンの愛と死―その歴史と風土と・中』東出版。チースクリク『高山右近史話』聖母の騎士社。浅田晃彦『茶将・高山右近』春陽堂。セルメニオ『聖将・高山右近』中央出版社。加賀乙彦『高山右近』講談社。長部日出雄『まだ見ぬ故郷―高山右近の生涯』新潮社。津田千恵『織田信長と高山右近』。

イエズス会立山修道院から

黙想会のご案内

テーマ：キリスト者として私が生きる意味
日　時：2013年2月9日（土）～11日（月）
指　導：ディアス師（イエズス会士）
対　象：青年男女どなたでも（40歳代まで）
場　所：長崎黙想の家(長崎市立山5-8-30)
参加費：10,500円（2泊3日）
予　定：9日（土）16時集合、夕食、オリエンテーション／10日（日）朝の祈り、ミサ、朝食、お話②、昼食、お話③、夕食、お話④、聖体賛美式／11日（月）朝の祈り・東日本大震災祈りのリレー、ミサ、朝食、お話⑤、昼食（会話）

申込・連絡は
イエズス会立山修道院 Sr.中島まで
℡095（821）4577
FAX095（821）4585
メール：ret-nagasaki@dream.ocn.ne.jp

会と催し（1月）

1日（火）神の母聖マリア
▼世界平和の日
4日（金）ルカ神父命日（一九九八年）
▼七田八十吉神父命日（一九八〇年）
5日（土）教区司祭新年会・教区本部・16時
▼神学生を励ます会・ザビエル教会
▼教区本部仕事始め
6日（日）主の公現
7日（月）盛克志神父霊名（聖ライムンド）
13日（日）主の洗礼
14日（月）永島泰蔵神父命日（二〇〇二年）
▼ME鹿児島・教区本部・13時
18日（金）キリスト教一致祈祷週間・～25日
19日（土）ハイシク神父命日（一九八九年）
▼宣教学校・13時30分・教区本部
20日（日）年間第二主日
▼キリスト教一致祈祷集会
▼レジオマリエ鹿児島コミチウム・教区本部
21日（月）坂本進神父のホリスティック聖書講座「マルコ福音書の読み方　イエスと十二使徒」・ザビエル教会集会室・10時・五百円
25日（金）聖パウロの回心
▼郡山健次郎司教霊名
26日（土）フェリエ神父命日（一九一九年）
27日（日）年間第三主日
▼カトリック児童福祉の日
28日（月）司祭大会・薩摩川内市・～31日
▼オリーブの会・教区本部・14時
31日（木）コンベンツス
▼司祭評議会

【ノベナの意向】司祭のため（20～28日）

+KABAYAN SEKSIYON+

"Pagsasakatuparan sa Vaticano II"

Mga bagay-bagay na dapat nating malaman at matutunan bilang mga Krsitiyanong Katoliko hingil sa mga turo ng Inang Simbahan tungkol sa buhay pananampalataya.Sa ngayon mga panahon,tayo ay nabubuhay sa modernong teknolohiya na nagkakaroon ng epekto sa buhay natin lalung-lalo na sa buhay pananampalataya.Nararanasan din ng simbahan ang mga bagay-bagay na ito na pwede natin matawag na `Simbahang Nagpapanibago`.Kaya muli ang Inang Simbahan ay gumagawa ng pag-aaral hingil sa mga pagbabagong ito.Binibigyan pansin ngayon ang Katesismo ukol sa Vaticano II.

Ngayong patungo ang Simbahan sa ika-50 taong anibersaryo ng Ikalawang Konsilyo Vaticano,may mga katanungan pa rin kung paano maisasakatuparan sa buhay ng Simbahan,sa pinakamabisang paraan,ang mga natalos na katotohanan.

Kailangang unawain at isakatuparan lahat ng nasusulat sa labing-anim na mga dokumento ng Vaticano II bilang isang kabuuan;hindi sapat na bigyang-diin ang ilan lamang mga aspeto nito, at magpabaya sa iba.Halimbawa,hindi maaring sabihin na mainam ang mga katuruan ukol sa buhay relihiyoso at pagkapari,samantalang binabalewala ang pangarap ng ekumenismo at diyalogo sa ibang mga relihiyon.

Hindi rin tama na ibukod ang Simbahan bago ang Konsilyo at pagkatapos ng Konsilyo na tila nagpapahiwatig na ang Simbahan pagkatapos ng Konsilyo ay isang "bagong Simbahan."Kabahagi ang Vaticano II sa pag-inog ng tradisyon ng naunang dalawampung konsilyong unibersal.Nanindigan si Papa Benedicto XVI na ang "katapatan sa kahulugan ng reporma at pagpapatuloy" ang tamang paraan sa pagpapahalaga sa Vaticano II,ang dakilang handog ng Espiritu.

Lumipas na ang ilang dekada, ang buhay ng Simbahan ay palagi pa rin ginagabayan ng Banal na Espiritu ng Diyos. Upang maisakatuparan ang napakahalagang plano ng Diyos para sa sangkatauhan, ang "kaligtasan ng lahat na kanyang mga nilikha".Gumagalaw ang Espiritu ng Diyos sa loob at labas ng Simbahan.Kaya ang lahat ng taong nabibiyayaan ng pagpapala ng Diyos, ang buhay ay punong-puno ng pag-asa at kagalakan.

Kaya ating bigyan pansin ang mga pagbabago at nagpapanibago sa Simbahan.Buksan natin palagi ang ating mga isipan at diwa at puso, para maunawaan natin ang napakagandang plano ng Diyos para sa ating lahat, ang maging malaya sa anumang bagay na magdudulot ng tamang kaligayahan na magdadala sa atin sa buhay na walang-hanggan.

Kaya ang pagdating ng Bagong Taon 2013,sana higit natin makita sa buhay natin ang mga pagpapala na ibinigay sa atin ng Poong Maykapal.

Binabati ko ang bawat isa sainyo ng:Bagong Taon 2013

Katesismo ukol sa Vatican II (Fr.Dino Orolfo)